

双極性障害 第3版

病態の理解から治療戦略まで

加藤忠史【著】

評者

渡邊衡一郎

杏林大学精神神経科学／教授

本書は、現時点における双極性障害のまさにすべてが詰まっている、と言っても過言ではない。双極性障害の歴史に始まり、疾患の概要、診断や治療戦略の立て方、さらには最新の生物学的知見による種々の病態仮説に至るまで幅広く網羅されており、引用文献だけでも 813 篇にのぼる。この著者の豊富な経験とこの膨大な知見に基づいた本書は、圧倒的な説得力を持っていると言えよう。

評者がまず驚いたのは、本書の礎となる初版は 1999 年に発表されているのだが、これは著者が医歴 11 年目にして執筆したということである。当時は、まだ双極性障害に対する理解も不十分であった中、医歴 11 年目にしてこのような成書を完成させたことに驚きを隠せない。このことから、著者が双極性障害研究の第一人者であることは間違いない。

初版の発表から 20 年、双極性障害についてはさまざまな議論がなされ、かつてないほどに注目を集めてはいるものの、現状として

は未だ定説となるものが少ない。そんな状況の中出版されたこの第 3 版は、異なる説が存在する場合は両論を併記し、さまざまな病態の記載に続いて症例を提示するというで、発展途上とも言えるこの疾患の“今”を非常にうまく表現している。一般的な成書は、「この疾患の症状はこのようなものである」、という記載で構成されていることが多いが、字面だけでは精神科の専門医でさえも実臨床でのイメージが湧きにくいことがある。しかし本書では、疾患ごとの症状に加えて症例を見ることのできる病態をより深く、またどのように経過していくかをより具体的に知ることができる。さらに、混沌としているエビデンスに関しては、著者の丁寧な解説が入り、どのようにエビデンスを読み解くべきか、理解を深めることが可能となっている。

双極性障害における名著としては、洋書ではあるが 2007 年に出版された Goodwin と Jamison による “Manic-Depressive Illness: Bipolar



Disorders and Recurrent Depression” が一般的に有名であるが、本書はもはやそれを上回る名著と言ってもよいのではなかろうか。

この分野の研究や治療は日進月歩である。数年後さらなる進化を遂げるであろう第 4 版を期待せずにはいられない。いずれにせよ、本書は双極性障害治療に携わる医療者の必携の一書である。読み応えのある 1 冊であるが、これまでの経験や知識の再確認ができるとともに、新たな視点を得られるかもしれない。ぜひ臨床や研究の傍らに置き活用していただきたい。

A5 判・頁 440

2019 年 6 月

定価：本体 5,000 円＋税

[ISBN978-4-260-03917-8]

医学書院刊